修士論文（要旨）
2017 年 1 月

地域在宅高齢者の自主活動が総合的移動能力・抑鬱度・社会的ネットワークに及ぼす影響

指導　渡辺　修一郎先生

老年学研究科
老年学専攻
215J6007
趙　伊喬

Master's Thesis(Abstract)
January 2017

The Influence of Voluntary Activities on the Mobility, Degree of Depression, and Social Networks of Elderly People Resident in the Community

Yiqiao Zhao
215J6007
Master's Program in Gerontology
Graduate School of Gerontology
J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor: Shuichiro Watanabe

目次

研究背景 1
対象と方法 1
結果と考察 1

参考文献

1. 研究背景

今日もはや単に長生きするのではなく、健康寿命を延ばし、生活の質を向上させることが重要な課題となっている。このような中で、社会参加は高齢者のネックワーク作りや心身的健康を維持するための一つの有効な方法・手段であることが報告されてきている。社会参加、対人的ネットワークと孤独感の関連性がいくつかの研究で指摘されている。本研究では、地域在宅高齢者の社会的な活動のうち自主的な社会活動に注目し、自主活動が身体的・精神的・社会的健康に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

2. 対象と方法

東京都健康長寿医療センター研究所と A 町役場保健センターが共同で実施した郵送調査結果を許可を得たうえで分析に用いた。本研究では、2007 年に埼玉県 A 町の 55 歳から 84 歳の住民から無作為抽出された 2123 人に対し行われた、各種の社会活動、総合的移動能力、抑うつ尺度 K6、情緒的および手段的サポートの状況などの郵送調査結果および 3 年後の 2010 年に同対象に同様に実施された調査結果を分析した。

総合的移動能力を身体的健康指標、抑うつ尺度 K6 を精神的健康指標とした。社会的健康指標としては社会的ネットワークのうち社会的サポートネットワークに注目し、社会的サポートネットワークの指標として、情緒的サポートおよび手段的サポートをしてくれる人の数をそれぞれの指標とした。自主活動の指標としては、地域行事への参加、老人会活動、趣味の会など仲間うちの活動、社会福祉・ボランティア活動、特技や経験を他人に伝える活動、消費者団体・自然環境保護などの活動について、それぞれの頻度を指標とした。

総合的移動能力については、低下をイベント発生とした二項ロジスティック分析にて、その他の健康指標については共分散分析にて健康指標と自主活動との関連を検討した。

3. 結果と考察

ベースライン調査にて分析項目全てに回答した者は男性 376 人、女性 371 人で有効回答率 35.2%であった。また、2010 年の調査にて分析項目全てに回答した者は男性 290 人、女性 306 人で追跡率は 79.8%であった。男女ともひとりで外出できる者の割合は年齢階層が上がるに従って少なくなっていた。ベースライン調査において抑うつ症状があるとされる K6 が 5 点以上の者の割合は、男性が 18.4%、女性が 27.0%と女性の方が有意に多かった。手段的サポートの得点と年齢区分の間には男女とも有意な関連はみられなかったが、女性の情緒的サポート得点は、75 歳以上は 55～64 歳に対し有意に低かった。自主活動で

は、地域行事への参加は、女性では年齢区分が上がるに従い少なくなっていた。老人会への参加は、男女とも年齢区分が上がるにつれ増加していた。趣味の会、ボランティアへの参加、特技や経験の伝授は、男性では、ほとんど参加しない者の割合が年齢区分があがるにつれ少なくなっていた。

総合的移動能力は、性・年齢の調整後も、趣味の会にほとんど参加しない群ではよくする群に対し低下のリスクが有意に高かった（RR=4.18）。抑うつ度は、老人会によく参加する群は、ほとんど参加しない群より有意に改善する関係がみられた。情緒的サポート得点の変化では、老人会にほとんど参加しない群に対し、時々参加する群が、趣味の会にほとんど参加しない群に対しよく参加する群が情緒的サポートの増加と有意に関連していた。手段的サポート得点の変化では、趣味の会、特技や経験の伝授、消費者団体・自然環境保護の活動が有意に手段的サポート得点の増加と関連していた。

本研究の結果、老人会や趣味の会によく参加することは、高齢者の総合的移動能力、抑うつ度および社会的ソーシャルネットワークに好ましい影響を与えることが明らかになった。

参考文献

1) 内閣府（平成 28 年）高齢化の現状と将来像　平成 28 年版高齢社会白書（全体版）

2) 厚生労働省（平成 28 年）:『介護保険事業状況報告（暫定)』

3) 盧怡慧（2001）　高齢者の『人生の設計課題』における知恵-特性の解明及び生活経験との関連　教育心理学研究，49，198-208

4) 斎藤静（2008）:『高齢者における生きがいと適応に関する研究　−ネットワークの観点から−』

5) 永松俊哉，他（2000）　地域高齢者の生活体力に関する縦断研究-生活体力の加齢変化と日常生活行動との関係．体力研究，99：7-5

6) 小窪輝吉・高橋信行・田畑洋一（1998)『過疎地における高齢者の孤独感と個人的、社会的特性との関連-健康状態、対人的ネットワーク、社会参加との関連を中心に』「鹿児島経済大学社会学部論集」17（3)，1-20

7) 茆海燕（2012)：高齢者の社会参加に関する文献レビュー　129-146

8) 消費者庁(昭和 36 年 6 月から平成 11 年 4 月)『第 9 次国民生活審議会総合政策部会報告』

9) 東京都高齢者研究・福祉振興財団、東京都老人総合研究所、社会参加とヘルスプロモーション研究チーム（平成 20 年）:『第三回アンケート結果概要』

10) 金貞任、新開省二、熊谷修、藤原佳典、吉田祐子、天野秀紀、鈴木隆雄（平成 16 年）:『地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因 −埼玉県鳩山町の調査から-』第 51 巻　日本公衛誌　第 5 号

11) 鳩山町ホームページ　人口と世帯

12) 厚生労働省（2010)．平成 20 年度介護予防事業（地域支援事業）の実施状況に関する調査結果．厚生労働省ホームページ（http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/03/tp0326-1.html）

13) 川上憲人，近藤恭子，柳田公佑，古川壽亮（2004)『成人期における自殺予防対策のあり方に関する精神保健的研究』　平成 16 年度厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学研究事業）「自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究」 分担研究報告書

14) 本田春彦，他（2010）地域在宅高齢者における自主活動への参加状況と心理社会的健康および生活機能との関係　第 57 巻　日本公衛誌　第 11 号

15) 岩佐一，他（2007）　日本語版「WHO-5 精神的健康状態表」の信頼性ならびに妥当性　-地域高齢者を対象とした検討−　第 54 巻第 8 号「厚生の指標」

16) 島貫秀樹，他（2007)「地域在宅高齢者の介護予防推進ボランティア活動と社会・身体的健康および QOL との関係」第 54 巻　日本公衛誌　第 11 号

17) 星旦二，櫻井尚子「社会的サポート・ネットワークと健康」季刊・社会保障研究　Vol.48

No.3

18) 真田樹義, 他 (2010)「日本人成人男女を対象としたサルコペニア簡易評価法の開発」 体力科学 Vol.59(2010)No.3 P291-302

19) 藤田幸司, 他 (2004)「地域在宅高齢者の外出頻度別にみた身体・心理・社会的特徴」 第51巻 日本公衛誌 第3号

20) 新開省二, 他 (2005)「地域高齢者における“タイプ別”閉じこもりの出現頻度とその特徴 第52巻 日本公衛誌 第6号

21) 古川秀敏, 国武和子 (2007)「地域在住高齢者の抑うつの関連要因-N県N町の老人クラブの調査結果-」 日本看護研究学会雑誌 Vol.30 No.4

22) 野辺政雄 (2009)「高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて」 社会学評論 Vol.50(1999-2000)No.3 P375-392